

- 1 リハビリ棟着
- 2 浪曲流れる
- 3 長嶋氏の場合
- 4 小島氏の場合
- 5 鴫崎氏の場合
- 6 花火大会
- 7 リハビリ訓練
- 8 手指に物問う人
- 9 やがてちりぢりに

1 リハビリ棟着

約三日間をほの暗い救急治療室にて意識朦朧状態の点滴しっぱなしで仰臥した。それに続く一週間を脳外科病室にて経過見の後、幸いに医師の許可が出て、とある朝、回廊でへだたる独立した回復期リハビリ棟へと、若いナースの笑いながら押してくれる車椅子で手荷物と共に送り込まれた時点で、この一篇の第一ページ目が開くわけだ。

十日前の早朝、パソコンの最中に気分が悪くなり起きて居られず、へなへなと崩れた直後、すでに右半身には麻痺と硬直が伴った。典型的な脳梗塞の一症例だろう。

このリハビリ棟に来たら担当の老医師が二度目に、目詰まりした血管破裂による脳内欠損部の白っぽく映るMR画像を指し示し、小さなカンファレンス室でぼちぼち説明してくれた。要は、「出血ダメージが大きく、一部に凝固が残っている」との結論である。

「分かりました」と応じる他なく、脳の空洞部は埋まらない、と思うばかり。

十日前に発症の際、嘗て経験のない怖気襲来に慄然と、『ああ、これで自分の一生は終わった』と直感したのだが、その一方、意のままにならぬ身が藻掻いて電話器を探り当て、押しまちがいがながらボタンを何回か1、1、9とくり返し押した。向こうで誰かが出た。しかし、この窮状を訴えようとしても言葉をあやつる口が縫れ、受話器奥からの問いかけに応答不能だった。やがて手から受話器が落ちてしまい、それきり目の前に暗幕が垂れた。

そのどれくらい後だったか、誰かが表で玄関戸を激しく叩きながら名を呼び、僅かに応じるこちらの呻きに、横手のサッシュ戸を外し室内に侵入してきた。次は担架のままに、車内で救急隊員が病院を呼び、ほぼ脈拍の取れない旨を伝えていた。誰の脈拍だろうかと、うすぼんやり考えていると、サイレンを鳴らし救急車が動き出した。再び目の前を暗幕が込めて、次に目が覚めたらもう救急治療室の一隅で、外科医が見おろす真下である。大層広くて薄暗い室内を時折、医療器機やナースの影が行き来するのを見て、尚もこの一命が継続しているらしい状態にようやく気づき出した。暗いが死体安置室ではない。「必ず助けるからね」処置後の離れ際に医師が、そう言ったのが印象的だった。

だから、一度は身を離れ掛けた儲け物の我が命である。今、リハビリ棟で旧来生活に戻れないと改めて宣告されようと、正直、「ラッキー！」の実感なのだった。

2 浪曲流れる

この数日間で慣れた新たな居室381号（リハビリ棟3階東端に位置）に向かい、二度目のカンファレ

ンスから廊下に出て車椅子を転がした。感覚の薄い右腕が、だらりと垂れている。その手を車輪に巻き込まぬようにとりはびり棟のナースに何度か口うるさく注意を受けている。中でも第一回目のカンファレンス直後に、381号室に来て担当であると自己紹介されたベテランナース土橋さんから棟内生活説明のあった際、極めてクールに問われた。

「あなたは、視床（多分この字が当てはまる）部の損傷。それは先生から聞いた？」

私が首を横に振ると、その状態が何を意味するのか簡潔にこう言ってくれた。

「従来同様の生活は、もう望めない。そう思って」と、他の諸注意と一緒に。

土橋ナースの去った後、隣ベッドの先住者が私に声を掛けてくれて、

「驚いた。あの担当（看護婦）むごい言い方をすると呆れるような声を上げた。そっちの方が私には却って印象に残った。その人は一週間ほど後、物流の職場に復帰できた。

数日経つと私は、曲がり角での車輪操作や180度の方向転換はもうお手のものだ。居室381号から距離は近いが途中が混み合う3階食堂への往復に是非必要な操作である。

381号は四床の部屋の一つで、現時点の住人は三名。メンバーはやがて増減を経るが、症例はいずれも脳梗塞だった。その回復期の訓練を受ける為の運動設備が、真下の一階にある専用棟である。大腿部の骨折で入っている方も見受けたが、ごく少なかった。

さて、一般病棟から移った当日の宵、意外にも廊下の彼方から、三味線の伴奏音と共に浪曲が響き出した。その音源が大ボリュームと思えた。夕食後の静けさの中、すでに誰も居ない筈の食堂方面からだ。ここも病院内の筈だが、と思い興味をひかれ覗きに行ってみると、出入り口に仕切り戸のない食堂で、一卓を囲む三、四人がじっと耳を傾けていた。浪曲の趣味など持たぬが、場所が場所だけに奇異な眺めに抗しきれず前後も無く近寄ってみた。

囲んでいた物はカセットテープ再生機だ。掌サイズのコンパクトな音源だが、病棟だけに一種の破天荒な響きである。備品ではなく、誰かが持ち込んだ物に違いない。独特の朗々たる名調子と渋い枯れた声で演者は多分、広沢虎造（二代目）と知れた。そして聴き手は見るからに全員が患者である。すでに赤っぽいパジャマ姿の者もいる。試しに、こちらが試聴希望を言うと、直ぐに車椅子分のスペースを空け合ってくれた、同好の士をうれしく迎える感じであった。

島流しにあった一団が、孤島の浜辺で真ん中に焚火を囲む姿である。打ち寄せる波音の如く三味線がひびき、甲高い女声の合の手が要所で繰り返され月光の降るようだ。

カセットの片面が回り終わると、反転入れ替えの為に不自由な片手できこちなく操作した人が持ち主らしく、周りの皆は、おやつを待つ子の如く見詰めている。何度か再生スイッチの押し違いがあり、この持ち主も慣れていない様子だ。流れ出た演目は虎造（二代目）の十八番、『清水次郎長外伝』の一節である。三十分ほど回ったテープの終わり頃に、「丁度時間と成りました〜♪」と続編を予告した。実際に棟内へ持参の浪曲テープは、まだ予備が沢山あると持ち主が誇って言う。丁度切りの良いところで今宵のお開きらしく、皆満足顔で散り出した。

これは毎晩恒例（と、言っても今夜でまだ三回目だとのこと）で、参加自由なのだそうだ。入院生活に一つの楽しみができたと思い、持ち主の方に明晩もぜひ参加したいとお礼を述べ381号室に戻る。同室はもうベッド周りのカーテンが閉じてあった。夜勤当番のナースが、今日最後の投薬が必要な患者の世話を終える頃に、午後九時一斉消灯の就寝である。

右半身不随の寝姿を、凡その勤でベッド真ん中辺りにずり上げ、片側の落下防止柵に立て膝を預けたが、はて？右腕が何処にあるのか一向わからず、左手でまさぐったら柵の外に飛び出していた。自分の体の一部が、所在感覚不明とはっきり意識したのはこの夜が最初で、以後この経験を様々に繰り返すこ

とになる。それは、決して慣れることのないくり返しだ。

次の晩、浪曲を聞く同士の会には皆よりも早く食堂に行って待っていた。持ち主が二番目に車椅子で来て、心がけの良さを歓迎してくれた。そして続く三晩目には、当日の昼に381号室への新入りと成った小島氏（脳外科病棟で数日間ほど同室だった方）も浪曲に興味を示し、一緒に食堂へ行き新たな聴き手に加わった。この人は、入室当初から立って寄りかかる方式の歩行器使用である。一口に脳梗塞患者と言っても各々の欠落部位が異なり、全く同じ後遺症例はなさそうだ、少なくともリハビリ棟でこの後の二、三か月間に経験した限りは。

ところで夕食後のひと時、一つテーブルを囲み次郎長伝を聴く楽しみは、数日後にあっさり禁止の憂き目を見ることに成った。即ち、他の患者から騒音との苦情がスタッフステーションに寄せられて、カセットテープ再生機は突如お役御免と相成った訳だ。

その結果として、すでに顔見知りの仲間が気の合う者同士で、ひまな折の徒然に互いの居室を訪ね合うようになった。一般病棟と違い、ここはお互いの移動自由である。

仮にも居場所が回復期リハビリ棟と言うだけに、ここで暮らす主眼は、専任スタッフ（病院所属）によるリハビリ訓練を集中的に受けることにある。その対象は大きく分けて三つ、手・足・口の分野に別れ、訓練場所はリハビリ棟一階に完備された体育館並み設備や、或いはこじんまりして落ち着く対面会話室が整っている。つまり各人が一日当たり三教科ずつ、前記の三分野を資格有る専門スタッフに習って行くのだ。原則的に開始時間とトレーナー役のスタッフは必ずしも一定しない。慣れてみると、午前の一つ、午後に二つという組み合わせが多い。スタッフ側は、訓練やその観察経過を、都度すべてPC端末に入力保存し、スタッフ間で共有している。

午後の訓練は遅くても五時前に終わり、それ以後の患者は棟内の自由行動である。但し廊下には常時作動中の広角監視カメラがあり、二基のエレベーターは、見通しの利くスタッフステーションの真ん前だ。このエレベーターで一階のリハビリ訓練室へも、長い通路で隔たる一般病棟一階のコンビニ売店へも行ける。たまに表玄関から、ついふらふらと院外へ脱出した患者のぎこちない足取りを、広い訓練室の窓越しに見かける時もある。勿論、すぐに手配され連れ戻されるのだが。

3 長嶋氏の場合

一日の訓練が終わり、もう夏季近い暮れなずむ夕食までの自由時間に、人恋しく他室を訪れたり来室を迎えたり、或いは同室同士で無駄話に打ち興じる。話題は、自ずと心身状況に関する範囲が多い。それが身の不安定な現在、一番の関心事なのだから。

たとえば、カセット再生機の持ち主（長嶋氏）の居る373号室に新入来の人が、夜中になって金切り声の長い悲鳴を上げたらしい。翌朝の当人には悲鳴の記憶が無く、片や同室者が数晩で寝不足となり、元凶人の部屋替えをナースに頼んだという一件。その直後だったのか、我々の381号室に新人（小島氏）が配属された。お互いに不自由な身の世話をしあって仲良く生活を始めた或る晩、静寂を破る突然の恐ろしい悲鳴が、じっと疎んで耐える我々を見舞うのである。後で知るが、373号室を（訳を知らされず）追い出された当人なのだった。

目端の利く長嶋氏は、してやった等と言いはせぬが、381号室に遊びに来た折、「ここならば」と島流し先を見つけていたか知れない。自分から名乗るもおこがましいが、381号室は当時寄り合ったメンバーの三人が偶然、おっとりしていたのだ。

居室定員四名の各部屋は、入所者によってそれぞれに印象が異なる。直ぐお隣の380号室は、四人中

に気難しい方が二名（大腿部骨折と臓器疾患）居てベッド周りのカーテンを一日閉じっぱなしであり、部屋が薄暗く訪れ難い印象だ。その隣の四つ 375 号～378 号は個室だが、一組の夫婦がひとり各二部屋ずつを占有している。二人とも脳梗塞発症がほぼ同時期だったと聞く。特にミセスは重度の後遺症で咀嚼がままならず、食堂での毎食に介護の手を要する身だ。この夫婦はまだ若い、財産家のお金持ちとかで、相部屋とは一見して待遇が違う。居室のスペースに、贅沢な私物も多く運び込まれているのが時に覗けるのである。この個室四部屋とも他人が立ち寄れそうな雰囲気はまるでない。

374 号は欠番で、373 号室に長嶋氏と他もう一名が居る。きわどいジョーク好きの二人の間で、朝一番から始まる派手な掛け合いの遣り取りに、第三者は追いついて行けない。爆走する感じの冗談を次々にひねり出す。暫く同席するうちに、毒気ある二人の疾走感に当てられてしまい、下手をすれば一緒になって暴走し、あらぬ淫らな言葉を口走り出しかねない。お二人は笑い転げるだけだが、つられて喋ったこちらは、自身の無節操さにつくづく嫌気がさすだけ。

長嶋氏とその同室者だけが、朝起きたてから一緒になって操れる言葉遊びの世界らしい。同室の人は、まだ若いが一生働かずに暮らせるリッチな境遇だとのこと。着ている生地や、特別食を摂る様子からしても順風満帆な人生らしい。度々見舞いに現れる、可愛らしい姪子も印象きらびやかだ。ただ一つ脳梗塞発症だけが予定外だったかも、と嫌みの一つも呟きたくなる。

夕方には、長嶋氏自身も見掛け上の身分差の息抜きの為に、気安く 381 号室にやってくるようになり、嘗て自分で追い出した小島氏の悲鳴が 381 号の同室に苦も無く受け容れられている、その不可解さに対し、目許がほっとして向き合う訳である。もちろん、いまだに小島氏の人の良い鈍重さを面白がり、それと無くからかう遊びを止められないでいる。

発症前の長嶋氏は、自営レストランで腕をふるう料理人、それが脳梗塞で利き腕側の半身が麻痺してフライパンも握れず、やむなく閉店に至った、その後、幾つかの病院と付属施設を不満足のうちに経た後、漸く先頃ここに辿り着いた。現在、自宅内を車椅子で過ごせるよう全面バリアフリーに改築中だ。その落成までリハビリ棟生活で、ほぼ毎日欠かさず奥さんか娘さんが 373 号を訪室に来る。

氏は如何にも世慣れた洒落で人の気を逸らさず、しみじみした滋味ぶかい話し方が面白く、いわゆる名物親父の居る料理店が流行っていたことを確かに思わせる。悩みなど何も無きそうで自在に廊下を反転往復し、居室の冷房で固まった身に 381 号室前の窓辺で日光浴の好きな方だが、麻痺した右手の掌が夕方にはブクブク膨らんで来て肥大し、見るからに苦痛そう。夜眠っている間にその腫れは治まるらしいが、翌朝の目覚めと共に再び膨れだすと言う、奇天烈な冗談を飛ばす間も。食事は、力ないその膨らんだ手に、柔らかな太い柄を付けたスプーンを挟み込ませて摂る。時々床にその特製スプーンがポロリ落ちてしまう。すると、動く余地も無いテーブルの間で意地を張り、気の毒なくらい困り果てている。と言っても、無暗に声を上げたりして誰かに助けられるのを潔し、とせぬ余計なプライドも保っている人だ。自身をコントロールし兼ねる一面があった。

相当に狷介な性格である。自室隣の 372 号室に、彼に付き従う気弱い子分志望者が一人いた。泣きべそに近いその笑顔を嫌いながら、食堂往復に車椅子を押させていた。

そんな長嶋氏に意外な得意技がある。まさかの折紙細工である。不自由な手できこちなく複雑に折る紙片へ、チョンチョンと不要部を除く仕上げ鋏を入れ、やおら開けば、そこに見事なトンボやチョウチョや花影が出現する。眼前に手品を見たようで、思わず感嘆する。

「こうなる（脳梗塞）前は、子供たちにボランティアで教えていたものですよ」と声低く自嘲気味に述べるのだ。正直に褒めると、一階のリハビリ施設内にある言語訓練室のキャビネットや壁にも、やがてプレゼントされた彼の見事な作品がポツリポツリ貼りだされるのだった。

それ以外にも特段の趣味を見せた。すなわち、太い墨痕の走りも見事な書道で、彼の携帯電話に残された画像（扁額）等は、地域の小学校に贈られたものだ。そして名人の浪曲テープも蒐集して聴く、幅広い一種の趣味人が、家業のレストランから撤退し、今や毎朝の起き抜けからリハビリ棟の一室373号で、聞く人の肝を扶る過激で際どいエロチックな冗談口に身をやつしている。決して喜んでいる訳ではあるまい、自ら鬱屈しない方が無理である。

毎日現れる奥さんと娘さんを見る限り、同氏の年齢は（見掛け上の老成感を別にして）おそらく五十台半ばだろう。彼が連日の如く夕方の一ト時、381号室にユラリと入って来るように成ったのは、ここが唯一、気休めの場所になると気付いた為らしい。

4 小島氏の場合

前述したとおり、この381号室には嘗て373号室から長嶋氏の追い出した（と今では悪戯っぽく笑い認めている）、恐ろしい夢魔に絶叫する小島さんが居る。見るからに紛れもなく顔相に現れた人の良さは極めつけで、長嶋氏に対し373号室の新入り時にお世話になったという認識しか無く、多分、いや必ず冗談口の手ひどいオモチャにされて居た筈だが、その恨みなど今は塵ほどの欠片も無い。それが不気味なのか長嶋氏当人は、381号室にすっかり落ち着いた小島氏の様子を祝う口ぶりを見せた。今頃になって気心の知れた仲間扱いも敢えて辞さぬのである。ちゃっかりしている。

一方、無心な善人である小島氏の方は、381号の窓辺（リハビリ棟で抜群の眺め）で、車椅子の長嶋氏に、周辺民家の軒端を落ちそうに忍び歩く猫の件まで訥々と話す。もし聞き慣れても小島氏の口調は、後遺症ばかりではなく相当に言語不明瞭である。彼が一生懸命に話す努力が、ひしひしと伝わる滑舌の悪さだ。思わず聞き取ってやりたくなる。

レンガ積みの商売で成功したと有り難そうに本人が、ちょっと信じがたいような実例を挙げて言うのを、真っ当に受け取るしかない。つまり、日本で八方塞の某異国人を偶然の通りがかりに雇い入れ、その熱心を素直に認め、保証人となって耕作地を手配してやり野菜の輸出事業を興させた等は、想像だけでは話せまい。世に隠れた聖者の如き一面を備えた、上州弁丸出しの小父さんである。

381号の同室者は、朝目覚めの挨拶から定刻消灯の就寝までを共に一緒に暮らすから、小島氏に特有な口癖や行動パターン、それに発症前の仕事ぶりや家族構成の一端などを自然に知るようになる、およそ一週間も経てば。すなわち、深夜に彼が時として放つスクリーミング（金切り声）を引き起こすその正体にも、短時日のうちに見当がついてきた。

氏の商売が自営の石屋（レンガ積み職人）だ。何とか聞き取れた自慢話によれば、近郷近在の大きな建物は全て彼の手を経て基礎づくりが為されている。同業者に顔も広いので、組織づくりのブローカー役もできる。まさかと思ったが、その人集めやレンガの積み方の合理的コツも惜しまず教えてくれた。納得がゆく方法だった。そして、同時に高所作業（最も危険らしい三メートル程度）に付きものの滑落事故の件を隠さなかった。事故回数など言わぬが、口ぶりから察するに避けられぬその瞬間の心的外傷体験（トラウマと呼ぶべきか？）が、睡眠中に突然フラッシュバックする。どうやらそれが、脳梗塞で入院後に頻発し、家では従来一度も同居家族（妻・娘・息子）からの指摘は無い。

時として起こる彼のスクリーミングに、我々同室はもう慣れて、深夜の暗闇の中で意味不明な恐ろしい叫びが間もなく消えるのを、別段の苦にもせず待つ。381号室では、一々のトイレ通いに面倒なので同室の扉を開放してある。だから、深夜の叫び声が廊下に洩れて反響し、翌日は長嶋氏が来て、「どうだった？」と昨夜の様子を嬉し気に尋ね、一同の平気顔に呆れ返ることに相成る。

しかし或る朝、前触れ無しの小島氏転倒には我々も魂消た。横長に広いカーテンを引き開ける早起き

鳥小島氏の手で、部屋一杯に眩しい陽光があふれた途端、ズシーンと地響きがあった。反射的にそちらを見返ると、窓下の床に倒木じみた仰のけ姿がある。今の衝撃は、固いゆかに後頭部を打ち当てた音である。だがこういう場合、すぐ掻き起こしたりせず、「現場をそのまま保存、先ずはナースコールのこと」と常々一同が土橋ナースに厳命されている。

すぐにナースが三、四名飛んできた。逆さバツタの如く起き直ろうとする小島氏を、指呼してベテランが処置の手順を、比較的若いナースに実地で伝える。頭部の追加スキャナー（MR検査）手配が、急遽なされ、今朝の出来事として詰所のPC端末に転倒一件が記録され、そのデータが今日の始業前ミーティングでリハビリ担当講師間にも共用されるのだった。

小島氏は訳の分からぬまま自失・転倒したが、やがて様子見のくわしい検査も『異常なし』とクリアし、打ち身の違和感もなく部屋に戻った。そして家族の、以前に倍増す見舞に甘味を摂りがちでナースから規制を受けるのだった。危ない糖尿の気があるようだ。

だから、気合を取り直した小島氏が、定例のリハビリ訓練後に自室（381号）前の廊下で行う自主トレーニングに熱が入り、無心に足腰の屈伸を繰り返す不器用な姿を、ベッド脇に坐ってじっと待つ家族が心配したほどだ。口に出さぬが本人は現場作業に復帰したいのである。

すなわち地元の青年消防団員も努めるという屈強な息子が、父親の不在後一カ月目にしてすでに家業の陣頭指揮をとっており、もし何か相談事があれば夕方のごく短時間、病室まで親父の知恵を借りに来る。その倅の物腰に落ち着きがあり、九部通り大成している感じの頼もしさだ。また、汚れものや身の回りの世話は分担し、すでに嫁いだ子持ちで寡黙な長女が時を決めず影の如く入来し、父親が居ようと居まいと全て遣るべき事をこなしてゆく。また、日焼け顔の小さな妻（一家の母親）は畑の世話が終わると週に二遍ほど会いに来る。

「お宅の旦那の姿を、最近ちっとも見かけないが、どうかしたのかね？」と、近所の来客があったことなどを小声でボソボソと夫に伝える。脳梗塞で入院中であるのが、大袈裟な噂で広まるのを恐れているらしい。夫婦の会話も長女との会話も、そして長男と話す際も極めて物静かだ。自宅にあっても一家は恐らくこんな調子であろうと思われた。

そんな中、隠居した如き位置づけにある小島氏の関心は、381号室で我々と親しく話す内に、倅（長男四十歳弱）の遅ればせなる嫁選びの件へ急速に傾いている。実は、相応しそうな気立ての良い、内々の嫁候補を、入院後この棟内に見付けたのである。スタッフのひとりだがパート雇いである。年恰好も倅とは相応で、小島氏は本気だ。同室としても、彼の密かな熱心さを場違い等と一笑にせず、少しは役に立ってあげたいと思い、図々しくその候補者に話しかけ、それとなく暮らしぶりを聞き出している。バツイチの子持ちで、市内に母子二人住いだ。小学高年になる十歳の息子に、父親の存在が望ましく、再婚の機会待ちという一事も当人の口で解った。そういう口があれば、宜しくとのこと。

長嶋氏がそこに加わり、「あの女は名花だよ、小島も目が早い」と即座に宣って、しなやかな動きで男の目を惹く肢体と一種匂うような妖艶さを、ずばり指摘した。成程、だが褒めているのか危険信号を臭わせているのか、ちょっと分かりづらい言い方だった。

5 鴉崎氏の場合

381号室の住人を、この辺りでは是非もう一人、紹介しておかねばならない。この人は、他の脳梗塞患者に比べて発症年齢が二回りも若く、まだ四十代前半である。居住者の顔ぶれが個々の事情で短期間に入れ替わる381号室に、最後に現れた。すでに去った他の方々も、それぞれ忘れ難い印象を残していたが、互いの携帯番号まで教え合う仲になるには、時期的に言ってちょうどメンバー間の性格バランス

や回復度合いが釣り合ったのかも知れない。

鵜崎氏の入室は、すでに暑さの盛りに近い七月中旬である。梅雨明け後のギラギラする日射で茹だるような窓外は連日の真夏日で、周辺の民家に揺れかえる立木の緑陰が黒むほど濃かった。その頃ちょうど、臓器不能併発による一名の転院先決定と、もう一名の補助装具歩行（退院許可）とで二床が空となり、残る住人は前述の小島氏と私の二名だった。年齢はやや離れるが、気が合うのである。ついでに言えば二人は食事の席も隣同士で、食堂には示し合わせて出かけたものだ、つまり小島氏が寄り掛かり歩行器で先行し、私が車椅子でその後に付く。余地スペースの狭い食卓間へ、奥側の小島氏、手前の私という順に一度でピタリと収まる為だ。我々二人がきっちり揃うその呼吸を、うす笑いで長嶋氏が横合いで眺め、隣接テーブルから擲擲う。そのくせ彼がスプーンを落としたりすれば、ナースの気付く前に我々が動いて拾ってあげる仲だ。長嶋氏の子分志望者は既に退院していた。

今度の鵜崎氏は、食堂の反対側テーブルに食事位置が決まり、それでも三人一緒に部屋を出るようになった。脳梗塞入院と聞くが彼は一見、何の後遺症も無い歩行である。彼のベッド脇の袖机上はつねに整然としており、無駄な物が右往左往していない。

また、毎朝の起床ごとに備品の寝具を折目がつく程きっちり畳んで、目に気持ち良いほど清々しい。試しに真似して寝具を畳んでみたが、見た目がブカブカして、どうしても同等に成らない、しかし幸いにも毎朝畳んでおく癖だけは身に付いた。若い彼からの好影響である。

彼自身が節度よろしく、先住者と年齢差があるせいか控えめで、こちら二人の不自由な起居に気を使い、毎朝カーテンを引く際も冷房温度の調節をも、さり気なく手助けしてくれる。小島氏の時に発する真夜中の突発的叫びにも理解を示し、苦情は出なかった。

リハビリ訓練を受けに彼が部屋を出る合間の過ごし方は、それが一番楽なのかも知れないが、ベッドで足を揃えて伸ばし、背もたれ姿で辛抱よく、控えめに紙片を読んでいる。若しくは、手許照明下の袖机に向かい、何かのテキストに合わせて白紙に文字行を手習いしている。いずれも、単なる暇つぶしの行為ではない意志を窺わせた。

訊いてみれば鵜崎氏の身に纏いつく後遺症は、最初は自分の所在位置の不明感が強かった。何処に居るのかと迷子になる。それはほぼ治まったが、今は目の焦点の揺れて定まらぬ眩暈感、且つそれに加え身が脇に引っ張られる違和感による直進歩行の難しさだ。歩けばいつの間にか、脇の方向に片寄ってしまそうである。当然、表の一般道に出るには未だ危険すぎる。

テキストの各文字行を目で追って読み、且つ書写するのも、リハビリ訓練の宿題だそうで、毎日欠かさぬ自助努力なのだ。妻と二人の幼子を養うその身は、家族安堵の為にも早く社会復帰せねばならない。今は有休と傷病休暇の最中らしいが、そうとは息張って言わず、むしろ淡々と構えて居るように見え、我々とは全くメニューの異なるリハビリ（自転車の負荷ペダル漕ぎ）開始に汗を流し、戻れば夕刻は居室前の廊下歩行に精を出し、黙読と書写も怠らない。

その合間に鵜崎氏は、我々二人の先住者に付き合っ部屋窓や廊下東端からの眺めに気を紛らわす。たとえば、窓正面の大きな民家は三階建てで、屋上に正体不明のビニールハウスがあり、空気の入換えか温度調節用に戸が開け閉めされる。そんな場所で何の野菜を作っているかを皆で想像し合うのだ。答えがある筈もなく、眺めるだけで話題はたわいもない。

381号室の位置は最東端で、このリハビリ棟で最も眺望の利く一部屋だと何時か我々は気付いていた。近隣の所々に、によつきり建ち並ぶマンション棟や高圧線鉄塔に視界を遮られることなく、遠く隣接市の山並みや、陽の傾く頃の西側に市営野球場の黒い森と照明塔を望めるのだ。ちなみに、この西側の視界を、もう少し南に外れた位置にある筈の、四角くて高い煙突の下が鵜崎氏の勤め先、竣工新たな市営

クリーンセンター（焼却場）で、若いながら彼はその電子制御式オペレーター室の主任である。先日、その係の部下が仕事帰りに見舞いに来た。氏と同様に若く、見るからに優秀そうであった。

6 花火大会

毎日の生活がリハビリ訓練も含め規則的にルーチンワークの如く繰り返された。制服姿^{せいふくすがた}のことなる外部の清掃業者が、全部の居室や各所のトイレや回り廊下の隅々まで、毎朝素早く行う目立たぬ働きは言うまでもない。その清掃は、入居者が体操を兼ね朝食を食堂で摂っている間におこなわれ、皆の戻るまでには全てが整然と片付いている。それに続いて、ナースが訪室を兼ねる検温や加療通知や、熱いおしぼりセットの配布に回る。そしてリハビリ担当講師が出勤、三階のスタッフルームで合同ミーティングに加わる。病院は、俯瞰すれば一個の蠢く有機体だろう。

患者当人に限って言えば、或る者は或る朝食後に手荷物一式姿で、リハビリ棟三階エレベーター口をナース総出の笑顔に見送られ、口々に励まされて、手を振って去る。めでたく退院である。その空きベッドが、すぐさま看護助手ペアの手で皺一つなく整えられ出し、夕方までにはナースと一緒に新たな患者が入来する。その間断無い人の流れに満ちている。そう気づかせる程に病む例が入れ替わりで多く、回復期リハビリ入棟^{にゅうどう}は順番待ち状態であるらしい。

一方、一ト目で分かるぎらつく外界の猛暑から遮断された棟内が、気温一定の快適下にある身体は、後遺症（障害と呼ぶべきか）にも次第に順応してくる。一種の力加減^{ちからかげん}を感じるのだ。

私の場合で言えば、ナース監視下のトイレ往復が続くうちに或る日、晴れて夜昼ともトイレ自律許可に変わり、同じく朝晩の着替えも看護助手の看視と指導を煩わせずにボタン嵌めまで、間違えながら何とか済ませるようになる。考えてみれば素晴らしい進歩で、ボタンを自力でボタン穴に通せるのだ。体得すれば分かる。今ようやく、三歳児以上に戻ったのである。

又、当人の意思表示次第でサービスされる熱い蒸しタオルセットの配給に、ベッドから身を起こし、思う箇所を不自由な手で拭う折の、天国的心地よさを肌でしみじみと知る。

或いは、夜間巡回ナースの豆ライト照射^{まめライトしょうしや}にふと目覚めて耳を澄ませば、棟内につたう気配で凡その時刻も知るようになる。それまでは果てしなく長い闇の中に居て、心細かった。

且つ、深夜突然のナースコールに暗闇の廊下をパタパタ駆け付ける足音と、そして誰かを手当するそばそばという対話に、嗚呼、まだ此处に居る自分が、無事ではないが生きている証拠と思ひ、夢うつつになかなか明けない外界の彼方からやがて曙光の兆す微かなオレンジ色を喜ぶ…。

また、看護助手の付添いによる機械浴許可の始まりに、お湯につかる全身の安らぎを覚えた日もある。感覚のない右の胸に、入浴剤をマッサージされた折の、微かな感覚の蘇生の驚きも知った。且つ看護助手の笑い声により、私の素足の濃い日焼けにシングル跡が残って白いのが、見た目にも可笑しいのだと知る。たおれる前日まで、五月の爽やかな日射しに連日サイクリングを能天気^{のうてんき}に楽しんでいた。リハビリ訓練を経れば、再びあの香^{かぐわ}しい木漏れ日の下を快走できる筈。

後々に思えば、これらは皆リハビリ棟に準備された再生のプログラムのうちの一過程だ。自身に関係ありと気付くか気づかぬか、それは人それぞれで違ふだろうが。

やがて、誰が最初に言い出したものか、例年この時期にある筈の「納涼花火大会」^{のうりょうはなびたいかい}の噂が関心の的になった。ひまな患者は無論、忙しいナースたちも訪室の折に、きらびやかな打上げ花火の眺めについて口にする。この近在でも、幾つかの花火大会があるそうだが、何と言っても圧巻は八月の第一土曜夜に、隣接する足利市でおこなう催し物が最大であるとのこと。

その打上げ会場は渡良瀬河川敷で、其処とこの病院は距離的にもそう遠くはない。数キロであろう。七階建ての病院本館からは夜空越しに見晴らせる筈だ。だが、リハビリ棟三階での勤めが比較的長いナースも或いは足利から通勤という看護助手の婦人も、ここからその花火を眺めた経験がないらしい。だから、噂はあくまでも噂であり、「もしかしたら何処かに見えるかも知れない」との怪しさである。但し、何故それが今さら話題になって居るか、誰もその訳が説明できない。はやり病じみている

この381号室の窓正面（真北）遠く、山並みを背景にくっきり目立つ高い煙突が望める。あれは隣接する足利市の焼却センターで温浴施設を含み、渡良瀬堤に面している。その堤沿いに蛇行する川の上流へ遡れば、架橋を二つ越え、花火大会の打ち上げ場所の河原となる。つまり、381号室の窓際から真左の遠くを望み、見当のつく野球場の森影よりも彼方に、夜ならば足利市の花火大会が居ながらにして望めるのでは、と三人（小島・鵜崎・私）は密かに期するものが有った。所々のマンション建築などに遮られず、その方向の見晴らしが利くのは、リハビリ棟381号室の窓際のみと既に確認してある。但し、遙かな花火が見えるか見えないか、確たる保証はない。それ以前に、花火大会そのものが宵口の激しい落雷発生で中止に追い込まれる確率の高い季節でもある。

打上げ当日の夕食後、暮れなずむ茜空がようやく薄闇を濃くしだす頃、381号室は消灯した。まだ七時前だ。やがて入口から射す廊下の灯を背に、担当ナースが訪室し、

「どうしちゃったの？」と訝しがった。七時が小島氏の投薬タイムなのである。

三人が寄っている窓辺に彼女も来て、「何か見える？」と間に並んだ。

さっきから三人で西空へ顔を向けていた。刻々と宵闇が増し、花火が見えるのだ。

もちろん闇の彼方の眺めで、炸裂音は聞こえない。打ちあがる花火の宙に引く尾の筋も見えはしない。だが、一瞬に咲いて煌めく大輪の幾重もが、連続的に一ト所にかたまって明滅し出すのがはっきり夜空に浮きでる。今の炸裂が納涼花火大会の開始合図だろう。すぐに切れ目無く、やや低空に小ぶりのラッパ水仙形が、まばゆく並びあって開く。直ぐそばなら、ジリジリと空を焦がすような灼熱音が頭上に降ってくるだろう感じ。

「あら、あら」とナースは呆れたような声を上げ、「此処から良く見えるのね？」

病棟から眺めるのは初めてと言ひ、走ってスタッフステーションに知らせに行った。すぐに他のナースたちも来て、他の部屋では遮られて見えないのと言ひ合ひ、勤務中ながら遠花火の饗宴に暫し見入った。それから、ナースから伝わったのか長嶋氏がひょっこり現れて、鵜崎氏と小島氏の介助で車椅子から立ち上がり、窓辺に凭れて並んだ。常に口の減らない人だが花火見物には素直に喜んで、いつもの揶揄い癖や冗談口が影を潜め、見ほれている。

火薬の爆ぜる臨場音の響かぬ遠花火の明滅は静かな孤独でもあり、そう長い間楽しめるものではないようだ。飽きはしないが次の一群が上がるまでの間が、頼りなく何かもどかしい。

「ここから飛び降りて、死ぬるかな？」ふと窓辺で長嶋氏がそう言った。今のは、自殺したいのだろうか。元気なようで、彼は以前にも窓辺で同じことを言っていた。

真下は、外来専用の駐車場にもなって居る。新たに黒くタール舗装されて硬い。この三階から落ちて、首や肩の骨を折ることは可能だろう。しかし建物との間に幅一メートル程の露地面（赤土）が設けてあり、まばらに植樹もある。そこに落ちる可能性の方が高い。今わざわざ下を見なくても同室の我々三人は毎日の気散じ見物で、そうと知っている。

「飛ぶ時は窓枠を思い切って蹴らねえと、あっちに届かねえで地面にぶち当たるべエ」と聞き取りにくい口調で小島氏がモゴモゴそう言った。高所作業の大ベテランである。

我々も今度は真下を見て、親しい三階の高さを感じながら、

「ちょっと柔らかそうです、あの地面では」と、これは勤め先のオペレーター室から遥かな下を覗き膨大量のごみ落下をコントロールする鴫崎氏が真顔でそう言い、頷いた。

「複雑骨折なら、すぐ本館に再入院できる」と私が応じた。

長嶋氏は、皆の下手な冗談が聞こえなかったかのように一段と窓辺に身を寄せ、花火や真下を見くらべた。外が暗いので彼の表情は窺い知れなかった。人を存分に揶揄って皆を笑わせ、洒脱で親分肌の濃い性格だが、利き腕がますます動かなくなっている事を可なり嘆いている。居室373号のクーラーの利きで腕が強ばってしまう身を、381号室前の日当たり迄きつて宥めつつ孤独に座って居る姿が、普段の彼と違うのを私は居室から眺めることがある。暫く陽光に当たって温もった後、彼は無言でクルリと車椅子を回し、滑らかに帰って行くのである。

但し、今の長嶋氏には、その立ち姿勢から自力で這い上がって窓枠をつかみ、ジャンプするまでの数秒間、自重を支えることは到底望むべくもない。萎えたその非力さ加減を、本人が一番よく知っている筈だ、指の間のスプーンさえ取り落としてしまうのだから。

我々四人が、窓辺に居たのは半時間にも満たない、ほんの束の間の感じだった。納涼花火大会の翌日、もう誰も夜空に明滅するショーについて何も言わなかった。

7 リハビリ訓練

専任講師間でスケジュール調整と主担当が決定されると、いよいよ患者各人の回復期リハビリが一階訓練室で始まる。訓練室は体育館内のバスケットコートのようにフラットなスペースと、周囲に並ぶ付属設備があり、十分に広い。訓練対象に、口（言語）、手指、足の三部門があるのは前述したとおりで、各一コマが原則一時間（含む休憩）、これが日課で繰り返される。

三部門の各特徴を簡略に言えば、先ず言語リハビリは「喋りにくさの自覚」だろう。これという独特な手段はなく、ただ講師と対話的に喋るか、テキストの短文を声に出して読む。これは朗読を講師に聞かすのである。次に、手指のリハビリは「つかむ」「さわる」「ならべかえる」「なげる」「むすぶ」「移しかえる」などの基本動作について麻痺の手指を慣れさせ、最終的には一膳の箸をあやつるのだ。そして、三番目の足リハビリは「歩行筋の復活」を目指す訓練そのものだ。

但し、そうはいくにも、後遺症の部位も程度も各人によって千差万別で、且つ後遺症自体が講師にも窺い知れぬゾーンである。講師に知識はあっても、実際の脳梗塞経験者ではない。誤解を恐れずに言うと、そのゾーン（後遺症アラカルト）は未だ言語手段に拠って、患者が感じているその通りに、書き表されたことが無いのだと思う。言い難い後遺症の実際経験から、そう思うのである。専門講師にすら触れられていない一種の未知感覚だ。

すなわち、リハビリ・トレーナーの資格を得た彼又は彼女が、専門知識として後遺症について既に学んでいようとも、この訓練場で触覚障害者の味わう、例えば『丸いものを丸く感じない指、おなじく四角いものを四角に感じない指』が、物に触るだけでは（視覚補助に頼らねば）形状の識別が不可能という事実を、第三者（講師）の持つ健全な体感では、妥当に受け入れきれない。優秀な講師ほど密かにその根幹的ギャップに悩むそうだ。

つまり、後遺症の諸症状を患者に一から毎回教わるしかないと悟るか、又はそう悩まずに構え、嘗て教科書で習った輪郭どおりに対処するか、その立ち位置をどちらか一つ選ぶとすれば、より簡単な道は当然後者の方である。毎日次々と目の前に現れるリハビリ患者に対し、一律に理論（一般通用する理屈）を当てはめても、訓練を業務のカリキュラム通りこなせる。

だから、痛みや痺れや引き攣りの愚痴を聞いてやり、一方でその腕や足に「もみほぐし」や「さすり」

や「伸ばし」の^{せりよう}施療をしている内に一コマが、それに午前がまた午後が、いや昨日と同じく今日一日が終わる。その為の^{きょうじ}道具が訓練室にずらりと揃っている。そのどれを選んで使い、一コマと一緒に過ごすかは講師側の^{じゆうせんたく}自由選択である。又あれこれの種類が豊富にあるから、患者を飽きさせる心配は無い。共に笑いながら日々カリキュラムをこなすのである。

さて、私の受けた手指の訓練では、或る一人の講師が自身に疑問を抱いていた。それを後遺症の立場で見えたとおりに書いてみるのも、一患者の幸いな勤めと思う次第である。

8 手指に物問う人

その講師を仮の愛称で「教授」と呼んでおく。^{ようつう}腰痛持ちの^{ひまんぼら}肥満腹、やや老けた年恰好の教師風。比較的若い病院所属の講師中で、いささか毛色のことなる年長者に思えた。手指リハビリの^{いちだん}一担当であるが、同僚から^{いちもく}一目置かれている存在、と見た。

その訳は多分、壁際の棚に並ぶ「手指リハビリ用具類」の多くが教授個人の所有物でもあるからだろう。どういう前後経過でそう成ったのか、一患者の身には分からない。

但し、病院の予算枠に過去、リハビリ用^き機材に充てる余裕が少なかった、と推測が付くようにはなる。量や数では、教授の持ち物の方が圧倒的なのである。そうして、彼の立てたカリキュラムに沿って訓練を受けるうちに自ずと、使用される^も道具の幾つものが、どうやら手作りであり、その作者が教授自身である一特徴（傾向）がつかめて来る。^{もの}物にも人の癖が目につくのだ。

特に、私のような製造工場経験者には、素人っぽさが見えてしまう。だが、決してそれが用足らずという、上から目線で言うのではない。基本的に好感の持てる作り方だった。

哀しいかな、一々のアイデアは良いのだが^{ただ}唯、^{きょうどけい}強度計算への配慮が足りない面が多々ある。材料の選択幅に乏しいのは、知識不足とそれに加えて加工しやすき優先の為だろう。やっつけ仕事になりかねない側面があるのに、それを責める気がちっとも起きないのは、各作製物のそこ^{こゝ}此処に、教授の^{しこうさくご}試行錯誤した^{あた}当てのない必死な思いが籠っているのが、よく分かるからだ。

たとえば、薄板を真っすぐ立てたりリハビリ用具があった。不自由な腕の^{かどういき}可動域を、自力で患者が伸ばす為のものだ。一言で言うと初心者風の^{ちせつ}稚拙な造りは、薄板が^{わんきょく}湾曲しかねないのを、やたらに木工ボンドで塗り固め補強してある。きっと見てくれまでは気が回らなかったのだ。

一応は彼の狙ったものの用には立つ、しかし、^{ぶざま}無様さは否めず、普通なら作り直しを試みる所だ。だが、この用具を使って後遺症の腕で、より高い位置に輪ゴムを何本も移しかえる訓練を^{おこな}行っている間は、用具の姿かたちがどんな物であろうと気にならないのが不思議だった。そして、やる度にコツが分かってきて移す位置がより高まると、それを大いに喜ぶのは教授なのだった。

「外国の文献を調べて見付け、まだ日本には似たものが無かった。自分で^{せつけい}設計して作ってみました」と、誇る様子もなくその種^{たね}を明かした。夏休みの^か工作課題の如き出来を、患者の私^{いぶか}が訝しがった^せ所為だ。

「ボンドをロウソク並に付け過ぎですね」と感想を正直に言って。

同教授の^{たんさくへき}探索癖はこの一個にとどまらず、他にもある。手で木製の盤面を傾け、狙った穴にサイズの合う鋼球をきちっと落とし込む訓練。「手持ちパチンコ台」と呼ぶべきか。又、木の盤面に^{めす}雌ネジのナットがサイズ別に埋めてあり、それぞれへ^{おす}雄ネジを不自由な手で回して嵌めこむ訓練、これは最後の一締め^{かひ}の可否が肝心なので「ねじ込み台」と呼んだ。或いは亦、^{ほしがた}布袋の中に入った^{しかく}星型、^{えんちゆう}四角、^{さん}円柱、^{かくちゆう}三角柱、動物型などの木片が有り、それを教授の示す絵カードに沿って、不確かな^{てざわ}手触りのみで工夫し抜き出す訓練「手探りゲーム」と言っていた。そして、少額の硬貨使用を想定したオモチャのコインで手に重みと滑りの感覚を思い出させ、自販機（貯金箱のスリットで代用）に挿入する、その際の手指の複

雑な動きを、コインを見ずに患者自身が改めて知る「買物ごっこ」訓練など、その他様々であり、教授の手製品カリキュラムを受ける日が楽しみになってきた。

で、当然、私の方でも熱が入るから、次回までに頭の中で手指の工夫を考え、教授の前でそれを実際に試行錯誤し、進歩の度合いが早まる。週の初めは未だ苦勞した或る訓練が、その同じ週内に、教授が嘗て経験したことの無い好成績を収めるようになるのだった。

最初は無理でも、例えば投入コインの重力に見合う手指の動かし方（向きや角度や、ずらし方や一遍に持つ個数の工夫）で、発症以前の滑らかさ迄は至らぬが同等の役目を果たす方法が、自分で見つかる。神経が遮断されているから勿論ぎこちなく、余分な動作を経ないと駄目だ…。しかし、訓練時間内に何とかやりこなし後片付けもして見せると、教授が目を見張る。

「今の動きは、どうやっているのです？」と脱帽し、感嘆する声が嬉しかった。

目の前で見たとしても、手指の一連の動き方は微妙であり、スローモーション撮影をせねば解らぬか知れない。それで、私なりに気の付いたやり方（後遺症補完）を、咄嗟に選んだ言葉で順序良く（と私自身には思える）説明したが下手で、教授がその理屈を一遍には聞き取れずに、

「あなたは、是非それを書いておくべきです」と口惜し気な声を発した。

利き腕が一向に稼働せぬ後遺症だ。教授の求めに応じられるべくも無い。時間も無かった。

口で飛び飛びに思い付きを喋るのと、繋がった文章に改めて留めるのでは、生死の差ほど分野が違うのを講演論文も書く彼自身が知っていた。口は二度と同じ線路を走れぬ暴走特急なのだ。

また或る日、教授製作の道具の改良点を、ぼつり、ぼつりと後遺症の口で私が言い出すと、それは即ち彼も（つまり製作後）考えていたが、まだ形にならぬ内容だと分かった。決して不思議な一致ではないと思う。こちらは使い勝手の立場でアイデアを正直に言っただけだ。

見ていると、他の若手講師が手指のリハビリ担当をする際には、男女とも教授の道具（壁際の棚に積んで揃えられ、関係者の出し入れ自由になって居る）を気軽に拝借し、あちこちで患者に使用している。しかし教授に遠慮してか、誰も不足点を言わぬらしかった。

で、教授は今回むしろ喜んで、改良する際の工具について患者（私）のお薦めをメモしていた。患者に依怙贖などしない人だが、どうも私は教授のお気に入りになったようだ。

と言っても、リハビリ効果の上がる一例としてこちらを観察したが、訓練用の箸づかいで彼お薦めの難物サンプルを簡単につまんで見せると、その日のうちに、私の実際の箸の使いこなし方を彼の作品の如くに、食堂へと見物に来るのだ、満足気に何気ない素振りをしながら。

或る朝、私のリハビリ開始時に必要のない道具（しかし、教授が内心で一番お気に入りの品）を、棚の箱から出して来た。いつもは畳んだタオルをテーブル上で、肩慣らしに前後に滑らすのだ。その日に限って置かれたのは、木製の突起付き台、そして手にゴムバンドで嵌める駒である。

「ウォーミングアップです。戻る迄やってみて」と簡単に使用法を言いのこし、自身は大鏡の前で太鼓腹を突き出して腰痛用のサポーターを付け直していた。車で三十分の通勤途中が苦しかったらしい。痛み過ぎて遅刻する朝もあり、患者同様でいわばお互い様だ。

曲げるに不自由の無い（今にして思い起こせば、未だこの当時は）右手首で、その道具を時計や半時計向きに駒の如くクルクル回していたら、向かい席に戻った教授が見守って、

「骨折で痛む手首に（リハビリで）触られるのを、極端に厭がる人もいる」ので、作らせ物と言う。「患者が自分で無理ない範囲のウォーミングアップをできる」道具だとのこと。

正式名称がある。この教授の道具（私物）には、みな元々の名前がある。特に外国製の訓練道具は奇

抜だ。これは、『リスト・ラウンダー』という聞きなれぬ名称である。元々はきつと舶来であろうが、日本人の掌サイズに合わせた、メイドイン・ジャパんだ。値段を聞いてちょっと驚いた。単純そうな木製の削り出しで、大小一セットが一万円程する。

「何組か必要なので（病院の）予算に挙げてもらっていたが」と聞かされ、その一言で教授自身がこのリハビリ部門の責任者であることが、私にも何となく解った。

だから他の講師たちも、職場に上司（教授）の私物がふんだんに有ることを幸いとして、仕事面で便利に借用している訳である。その活用を教授も嫌がってはいない。又、われわれリハビリ患者も知らず知らずにはあるが私物の恩恵に与っている。ドイツ語や英語で名称が箱に印刷された異国製のリハビリ具を棚から出す、その種類の豊富さに、単なる珍品集めの嗜好がある訳ではない教授の、熱心な追及態度がこちらにも感得されるのだった。

それで、リスト・ラウンダーの件だがと、顔を曇らせた教授が、

「でも、これを作る職人さんが引退してしまいました」と意外なことを言い、「日本に一人しかいなかったのですが、もう高齢でしたから」と、しみじみ顔である。

改めて、目の前の木工品を点検してみた。総体に素朴な造りで、主に木工旋盤が使用されたのだろう。組み立てた一部分に、ざぐって（座削り加工）締め込んだ金属ネジが隠れているらしき他は、全て滑らかな仕上げぶりで、手触りの良い木目が現れている。角々はみな滑らかなR（カーブ）で結ばれ、尖って居ず、如何にもリハビリ患者への配慮がなされている。一セットが数点の部品から成って居るが、全て職人が手作業で丸棒と角材から挽き出した物と知れた。

381号室に戻って、小さなノート型パソコン（リハビリ棟に移ってから、動く方の手で備忘録の日記を打っている）で、福祉用具の項の「リスト・ラウンダー」を検索してみた。あちこち当たっている内に成程、ほぼそっくりな木工製品の写真が画面に現れた。そして教授の言った通りだ。個人工房の主人であるその製作者（職人）が最近引退した旨が添えられ、且つ現在は既に在庫も尽きたらしい。あれの正体は、その都度のオーダーメイド品だった訳だ。

ふた昔前に職場の同僚だった友人に電話してみた。腕の良い機械加工職人の彼も、すでに定年退職者だが、毎日退屈しきっているのを知っている。こちらが脳梗塞発症の以前は、年に数度の旅行に出かける仲だ。すると、品物を見に来てくれるという返事である。

教授にその件を話し、現物（握り易いという小さな方）を一週間だけ借り受けた。百聞は一見に如かずで、友人が各部の寸法を図り且つ繋ぎ状態や表面の滑らかさを知る為である。

その頃、鵜崎氏のリハビリ訓練は、室内の自転車漕ぎ段階をついに卒業し、講師同伴で残暑の表へと散歩に出られるまでになっていた。今までは、381号室の窓から眺め下ろしていた外の風景の中を、実際に歩き新たに見つけた意外な事を、小島氏と私に土産物でもってきてくれる。道路の不思議な交わり方を聞くのも楽しいものだ。実際に表に出たからこそ予想外を発見するのである。

鵜崎氏はチラつく眩暈や引っ張られ感が薄れ、廊下で行う自主歩行も日々次第に自信がついて時間と往復距離を伸ばしつつあった。小島氏がそれに倣って歩行器を脇にとめ、廊下の手摺につかまり辛抱よく屈伸と伸びを繰り返す。私も見倣い、車椅子にロックを掛け、立ち上がって離れ、手摺沿いにおぼつかない足取りで長嶋氏の373号室を通り過ぎて一ト声掛け、また戻ってくる。すると、遅ればせに長嶋氏が車椅子追って来て、381号室の前で我々三人に新たな話題を聞かす。四人がそうやって固まっていると、通り掛かるナースが夕飯時刻の近いのを注意してくれる。

廊下東端のガラス戸を雷雲が黒々と籠め、既に突風の吹き出した虚空をガラスの群れが家路をさして
ちりぢりに上下している。私鉄駅の構内に灯がともったのが分かる

「じきに夜が来ます」と長嶋氏が溜息のような諦め声で言った。

長嶋氏は暗闇をとても怖がり、近頃は我々にそれを隠さない。彼が消灯時刻後に、非常灯の点いた廊下を東端まで車椅子で来て、非常口越しに私鉄駅やビルの明かりを黙々と、夜遅くまで眺めている孤影が381号室のベッドでも覗ける。特に、私や鵜崎氏の位置からは丸見えだ。

当初373号室で新入りだった小島氏が、真っ暗な深夜に長い金切り声を発し悪夢にうなされた折、同室で長嶋氏の受けた非常なショックと恐れが、今となって我々にもうっすら理解できたのである。彼は小島氏を、単に意地悪く追い出したわけではないのだ。

9 やがてちりぢりに

鵜崎氏の職場復帰の時期が近づいたのは、家族にも知れた。今までは三階スタッフステーション脇の面会コーナーで会っていた彼の家族が、381号室にも現れるようになった。小さな娘二人は勿論、母親までが氏と同じベッドに座りたがった。其処にかたまり、プラネタリウム見学や夏休みの宿題のことなどを楽しそうに父親に報告している。母親が単独で来るときは、部屋入口脇のロッカー内の荷物を持ち帰る準備をし、或いは職場に提出する書類の件を小声で相談している。手続きに要る医師の最終診断書であろうか。同室者は一切聞こえぬ振りをするのが常だ。

或る日、そんなところに長嶋氏が入ってきて、お別れを淡々と告げた。バリアフリー化の成った自宅にもう戻れるのである。彼の担当ナースから既にその日の朝、退院次第を聞かされていた。彼が来たからには、もう出迎えの家族が373号室に居るはずである。

「よう、退院後に遊びに来ないか?」と、長嶋氏は名残惜しそうに言った。

この市内の住所は、以前に聞いて知っている。だが、黙っていたら、

「電話番号、どうかな?」それを教えてくれとの意味で、また長嶋氏が言った。

それで、わざと意地悪ぶる返事で、「冗談がきついからね。電話、お断り」

「哀しい事言うねえ」と長嶋氏が微笑した。

苦み走った顔とは、長嶋氏のような男をさしているのかも知れない。

「丁度時間となりました〜♪。ね、お互い達者で居ましょう、それが一番」と彼へ応じた。

「それは浪花節だよ、詰まらねえ」と、笑って長嶋氏が何か吹っ切れた顔をした。

彼にしても受話器越しの交信だけでは、種が尽きると分かっていたのだろう。

鵜崎氏夫婦をそのまま置いて、三階エレベーター口まで見送りに行った。時に棟内の催し物を行う、スタッフステーション前の広場である。ちょうど昼勤のナースも全員並んだ。

家族(妻と娘)にやや遅れて、長嶋氏が373号室から車椅子を転がしてきた。こちらで迎える皆に見つめられ、照れ臭そうである。余所見をする振りが、段々と笑顔になった。

「お大事なさい」とナースたちは口々に言って手を振り、微笑んだ。

我々も手を振る。長嶋氏は初めて見せる真顔でこちらを向いたが、エレベーターの扉が閉じた。

いま気付けば私の隣に居た小島氏の視線が、背中を見せて散り出すスタッフの一人に釘付けである。その彼女は、我々から離れる前に白い笑みを零してからクルリと食堂へ向かったのである。そうだ今日は例の嫁候補のパート出勤日である。こんな場所で見ると所為か、図抜けてその姿態のなよやかさが目に付く。昼食前におこなう簡易体操の演技指導をする係も務めるが、ついその優雅な身のこなしに見とれ、思わず釣られて手足をじたばた動かす我々なのだ。

小島氏はまだ嫁取り話の切掛けすらつかんでいない。彼の屈強な倅が見舞い兼で相談事そうだんごとに来ると分かった日は、我々（私と鵜崎氏）の方がむしろ気が気ではない。倅と嫁候補とが廊下でバツタリ出くわすチャンスが生まれるのを、祈る気持ちで彼女の訪室（到来）を待つ。機械浴なども手伝う係だから、廊下で出遭う偶然の確率は高かった。機械浴室は381号室の目の前の曲がり角にある。但し、偶然のイタズラなのか小島氏が嫁候補の手助け（機械浴は介助者二名でおこなう）で入浴する機会は一度も無かった。順番が、他の介助ペアに当たるのだ。

そして、また何故か倅と嫁候補とがドラマの如くばったり行き合うシーンが実現せず、回廊でほんの数分の差のすれ違いが続く。もどかしかったが、小島氏に単独湯浴み許可が出て、機械浴室から隔たった通常のバスタブ使用に変わり、嫁候補に何か切り出すきっかけが一層薄まってしまった。

当時は、まだ退院前の長嶋氏が居て、嫁候補自身が密かに好む再婚相手の希望条件などを、洒脱しゃだつな口調を使って上手く笑わせ、当人から聞き出して来たものだ。それをニヤリと笑み、小島氏にも伝えた。けれど長嶋氏は、この縁談に無理あり、釣り合わぬ花と睨んでいた。

「(小島は)可哀想かわいそうに」と、ボツリ洩らしたことがある。

一方、小島氏の口調は彼女について話す場合、段々と「ウチの嫁」扱いに近づいた。名前を呼び捨てにしたりする。それを聞かされる鵜崎氏と私は、唯一黙って頷くしかない。

さて、教授と私は、鋼球の転がし盤の改善方法や、障害の手でも操れる箸や、薬包ぶくろの封を簡単に切るアイデアを出し合ったり、或いは気象の変化（ちょうど台風の余波で不順続き）が後遺症の腕にどんな感じを具体的に引き起こすか話したりで、親しみを増した。但し、患者とリハビリ講師という間柄を、お互いに崩さぬ範囲での打ち解けようではあった。

やがてリスト・ラウンダーの摸刻品もくくひん一式が友人の手で381号室へ届き、翌日その出来栄しやだつえに喜んだ教授が、棚の収納容器に未知の製作者（私の友人）の氏名を書き込んだ直後、私の訓練期間終了予定通知が来た。正確には、退院勧告たいいんかんこくと言うべきか。リハビリ棟に住める決まりの期限（三カ月）が近々に迫り、外の世界へ戻らねばならないのだ。

状態は、担当のベテランナース土橋が当初に予告したとおりである。脳を受けたダメージ個所に拠る私の後遺症は、リハビリ訓練を受けても効果幅は小さいと言われた筈だ。繰り返すが、当時の同室者（合計二週間ほどの滞在で退院、その後見舞いにも来てくれた）が、それを傍らで聞いて、土橋ナースを思い遣りに欠ける冷酷さと評した。確か私自身は、そう感じなかった。尋ねれば何でも答えてくれる看護のベテランで、生活上の迂闊な点を見逃さずに指摘し、噛んで含めるようにして私の後遺症が抱える危険性を染み込ませた。あれらは皆、彼女の親切心である。

車椅子からベッドへ移るやり方を、私自身が納得のゆくまで安全に反復させられたものだ。381号室でそんな扱いを受ける対象患者はただ独り、即ち私だけで、担当ナースの彼女は経験上から、何も余計に付け足さぬきつい宣告せんこくが、このケースには最も妥当と判断したらしい。そうしたとしても、私がめげないタイプだと初対面から既に見抜いたのかも。若し見間違えでその言葉に私が落ち込んで世をはかなむ自暴自棄じぼうじきに陥ったら、彼女は自信を無くした筈だ。

最後の退院予告も、このベテラン土橋ナースから受けた。当日、ベッドに私を坐らせたのだ。

即ち、「あなたは、このまま自宅に戻っても暮らせないから、それなりの介護施設に入る必要がある。頼れる伴侶はんりよが居ないのだから、その手の施設を退院前に決めなさい」と。そして、「その為に、このリハビリ棟に付属して地域支援専門のソーシャルワーカーが何人か詰めている。その係の一人を呼んでおくから、何でも安心して相談しなさい」と指導されたのである。

テレビドラマの如く、医師がめでたく退院許可を出し、病の癒えたハッピーエンドの幕切れと成るのではなく、リハビリ棟卒には、ここからが第二幕に入るのだった。

その二幕目の始まる直前に私は、ようやく何とか講師の付きっきりの補佐で歩行の真似事はできるようになったものの、杖を突く^{たんとくほこうきよとか}単独歩行許可は最終テスト後も下りなかった。私は少しなら歩けるのに、公正なジャッジは危険也の旗印^{はたじろし}を掲げたのだ。内心、それが大ショックだった。しかし現実には、他の退院前患者の例に見るような補助杖の選択過程も、かかどに嵌める^はオーダー補装具^{ほそうぐ}の購入過程も、脚部リハビリ担当講師から一切勧められなかった。

こちらから尋ねても明確な返事がないのが現実である。それを、希望があると受け取るのは私の勝手である。だから嘗て381号の同室者が、身に合うオーダー装具を足に嵌め、朝夕に音高く廊下を行き来する自主鍛錬^{たんれん}を繰り返し、幸いにも仕事場（ラーメン店経営）に復帰する例を間近に見ていたので、自分にもそういう日が巡って来るものだと願望的に錯覚していた。この頃、同室者と一緒に廊下を危いながらも歩いていたのは心の底に^{はかな}儂い希望があったからだ。

しかし、土橋ナースの手配したソーシャルワーカー（地域支援室所属）の一人が胸に名札を掲げ、或る日ニコニコしながら381号室に現れた。ぶらぶら歩きで私を同階の相談室^{いんそつ}に引率した。彼女の手には、カルテ（病歴）ファイルがあった。そして後遺症、即ち私の障害程度（まだ自分は健常者と思っていたが）でも入居できるという市内の当該施設から数か所を、その場ですぐ候補に挙げてくれた。しかも近日中に見学名目でそれらを訪ねなければならない、と見掛け上の小娘^{こむすめ}がニコリ言うのだ。何時でも空きがある訳ではないと明確に宣言され、ぐっと喉が詰まった。

聞けば、障害の判定度や手足その他の要介護状態によって受け入れ可能な施設は、おのずと決まってしまうという説明。そういう物ならば、と判らないなりに私が納得すれば、早速に小娘（ソーシャルワーカー）がその場から候補先の各施設と電話連絡（空き部屋有無の確認）をして、見る見る見学の予約を手配してくれた。段取りに一瞬の隙も無い。

後になってから、有り難いと思いつく思ったが、この時は唯^{そとぼり}どどん外堀が埋まり、ひたひたと敵軍（訳の分からぬソーシャルワーカーや地域支援の仕組）が押し寄せてくる印象だった。更には又、安全弁の役目として其処に^{しゃかいふくしきようぎかい}社会福祉協議会という存在が一つ挟まって介在するそうだ。その協議会に居るらしい、退院後の私の生活をバックアップする役目のケア・マネージャーと連絡を取らねばならない。それを私本人から向こうへ電話しなさい、という小娘の注文である。一遍に色々な変化がこの先に待っているのだと否^{いや}が応^{おう}でも知れて来た。こういう^{れんけい}連携の全てが、退院期の患者（私）を社会に戻す歯車の回転だと気づくのは後日のことである。

第二幕の上がる期限が迫っている。約三か月余を^{こゝ}此処の規則正しい生活に慣れ、のんびりした身は、つい先日の勧告を受けるまで、自分^{こゝ}はリハビリ後に元の住まいの戸建て襪褌アパートに戻るものと思っ込んでいた。旧式アパートで、入り口からして上がり^{かまち}框に大きな段差がある。また自炊するには流し台が高すぎるが、食料は従来通り自転車を使いスーパーで調達する、洗濯は通い慣れたコインランドリーで、という腹でいた。

381号室から直ぐの場所^{にそうしきそう}に二層式槽を備えた洗濯室があり、そこで立ち上がる操作訓練もしていたのだ。その隣の浴室で、普通の家庭用バスタブに張り巡らされた手摺^{てすり}を伝って単独の入浴も訓練し、浴後の着替えも順当だ。「大丈夫！」と構えていた。

だが発症前、朝に目が覚めて毎日繰り返し、又繰り返し、何をしていたか流れを思い出すと余りに平凡すぎる動作の連続でも結局、生活するとは洗濯と入浴だけでは済まない。

「大丈夫！」それが単純すぎる全くの見間違いと、今ようやく思い知るのである。

リハビリ棟内は全てがバリアフリーの構造だ。長嶋氏の前例で学ぶべきであったのに、全くの迂闊だ。自宅のバリアフリー工事手配とその竣工を待って彼が、効果の上がらぬ手や脚部リハビリ訓練に鬱々と耐える日々の様子を、すぐ傍らで見て笑いながら、全く彼の屈する表情の意味が分かって居なかった。今になって、これから自分を待つ未知の第二幕に、気が滅入って来た。発症以後のいわば次々に起こる変化が、否が応でもまだこの先、我が身に続くのだ。

土橋ナースがああ退院勧告の序に、「後遺症は始まったばかり。五、六年の間は身体の変化に、うまく付き合いなさい」と、謎の言葉を付け加えたのが、つい先日である。

381号室の入口脇にある四人用ロッカーの、左端が私の持ち物入れだ。ここに移って来た日から見舞いの度に姉と妹が、予備の身の回り品を収納してくれた。以後、初めて自分で扉を開き車椅子から覗くと、棟外に出ればこれから必須となる筈の物が、所狭しとばかり詰まっていた。私の想像を軽く超える量のものが有る。必ずしも新品ではないが洗濯を経て清潔に畳まれ、きちんと袋に詰められ入っている。つまり、嘗て家族の入院生活を経験したことのある主婦の手に成る物だった。男手ではこうも上手く整然と揃えることはできまいと思われる品々だ。感心する言葉も無く、眺め入るだけだった。

そこへ、首にタオル巻き姿の汗ばんだ鵜崎氏が、リハビリ外出から戻ってきた。同室三人の受ける訓練時刻は、週や曜日によってそれぞれ別々である。でも、私の退院予定は知っているはず。

「お帰りなさい、今日は何処まで行ってきたの？」

何も隠す気はなくロッカーを閉じて私は、そう彼に尋ねてみた。

半月後だったか、障害度審査に必要な役所提出用書類に、可動角度測定及び実測数値を書き込んでもらいに外部から予約し、もう一度リハビリ棟一階の訓練室を訪ねた折、三階381号室に、知った顔はもう居ない。すでに小島氏も鵜崎氏も携帯で連絡をくれ、退院した後であった。

以上